

研究、論説、詩歌、随筆の小誌(未発表のもの)

『羔』(No.1)

—1932年11月—

1932年11月

小池辰雄

(内容)

『羔』 創刊の辞

新生にあたりて

詩篇(1) (自由訳)

第1篇 第2篇 第3篇 第4篇 第5篇

(附) ヘブライ語と私

いのり(1)

1. いのり以前の問題

「眠りなき夜のため」上巻(1) ヒルティ

10月6日 10月7日 10月16日 10月21日 10月31日

「星のたより」(1)

(其1) 「人生のうた」

ロングフェロー

(其2) 「矢と歌」

ロングフェロー

「樅の日記」(1)

小池政美

「樅の日記より」(1) 序(編者)

「樅の日記」序

1918年11月23日(新嘗祭)

11月24日(日曜)

「みどり葉」(1)

*

「明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう

『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔。われかつて「わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云いしは、此の人なり。

我もと彼を知らざりき。然れど彼のイスラエルに踰れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』

——ヨハネ伝福音書第1章第29〜30節



*

『羔』 創刊の辞

神の羔の御恩恵ゆえにこの罪びとの今日はある。

限りなき恩寵を感謝し聖名を讃美せんこと、(1)神の国と神の義とを求めんことが、この小誌『羔』のすべてであらねばならぬ。

世の一切の言が消え去るとも、(2)神の聖言は永劫に立つ。(3)万象が朽ちゆくとも羔のみは久遠の実在であり給う。羔が在まし聖言が立つのであれば、われらは安んじて、(4)大いなる日を待ち望まんとおもう。(5)聖国の来らんことを！

〔註〕(1)マタイ6・33。(2)マタイ24・35。(3)詩篇102・26、イザヤ51・6。(4)

ゼパニヤ書1・14、ヨエル1・15、2・1、3、11。(5)マタイ6・10。

三十路に入らんとする秋の半、私はわが前生を終えた。そのすべてを知悉し給うはわが神あるのみである。あわれなるかなこの罪びと、奇しきかな神の摂理、深きかな主の愛。今や私はわが「永遠の愛」と共に新しき生命に甦った。この期ありてかこの小誌は生まれ出たのである。我らの生涯がいのりであるならば、これもまた我らのいのりの外何ものもなからう。地を去る日まで絶ゆることなき香として天に昇らんことを。

聖霊とこしえに我らの導者にてあり給わんことを。

夜もすがら雨風あれにし朝ぼらけ

虹は立ちたり大空高く。

1932年9月1日 弘暁

ある重大な決定が私の胸に奥に於てなされた。

*

新生にあたりて

「すべてをお任せして何事も天のよき様にと祈るのみでございます」

——第一信より

新生の旅の途にて我らの負うべき一つのものがある。それは十字架である。我らはイエスに従うものであるからである。我らはわれらの家庭を問題とすまじとおもう。我らが生を享けたのはそんなためではなかった。われらは世を渡らんためにつくられたのではなく、神を知らんがために生まれたのである。神の羔以上に我らが愛してよいものは一つとして存せぬことを知らんがために我らは在るのである。羔を愛する愛あらんか、我らはまこと



の愛を有^もつものであろう。源なくして水は流れ出でぬからである。我ら相互の愛が愛として問題視されるならば、それは禍なる哉である。我らのまなこをしてシオンの山に立ちたもう羔に向けしめよ。さらば我らはまことの愛に生き得るであろう。我らは一つである。生くることは人を愛することであることを多くの傷を受けてこそ学びたくおもう。

「神はその独子^{ひとりご}を賜いし程に世を愛し給う」

のである。我らは先ず、神からかく愛されたのであった。

神様、どうぞ我らの魂を砕いて下さいまし、我々はあなたの奇しき御導きの中に今日に至りました。あなたは我々を棄て給わじと信じます。願わくは我らの弱きをおあわれみ下さい。あなたの義が我らの骨であり、あなたの愛が我らの血であり得ますように。神様、ある時はあなたのみが愛し、あなたのみが戦つて下さるのでなければ、到底堪えられぬと存じます。そうです、いつもそのはずなのでございます。私共は何ものでもございませぬ。あなたが私共であつて下さい。日毎に私共の荷をお負いになつて下さい。力となつて下さい。どうか信頼が私共のすべてでございますように。私共自身などは本当にたたんでしまつたのでありますように。私共の眼が大いなる羔の日を望むものでありますように、心を聖国にお据えになつて下さい。人々の心がどうか救われますように。聖名の栄光がすべてのすべてでございますように。

我々の贖主^{あがなぬし}キリストのみ名により、アーメン。

己^{ひく}を卑^{ひく}うして死に至るまで、

十字架の死に至るまで順い給えり。

——ピリピ書第2章8節

*

詩篇 (1) (自由訳)

第1篇〜第5篇

原文 ルドルフ・キッテル編 ビブリア・ヘブライカ 第2巻 プサルミ (908頁) 1024頁

原文 (題本) Rudolf Kittel : Biblia Hebraica II . Psalmi (908 ~ 1024)

主要参考書 Kautzsch : Die Heilige Schrift des A.T. II .4.Aufl.

Bertholet : DasBuch der Psalmen

Die Psalmen übersetzt von C.Kautzsch. (Paul Siebeck)

Commentary on the Psalms, by Delitzsch. III Vols.



The Treasury of David, by C.M.Spurgeon. II Vols.
Die Bible. A.V.& R.V.
聖書

自由訳とは何の謂ぞや。

詩篇はいのりの書であり、讚美のうたである。

全心より溢れいつるまことある言の流れであり、

聖霊に感じて発する魂の息吹であらねばならぬ。

されば何よりも先ずそはいのちあるものである。

内的に形式をおのずからつくりゆくものであつて、

断じて形式によつて統一されるはずのものではない。

まことの詩とはかかるところに成る。

詩篇、此くの如きものである限りその翻訳もまた

然らんことを期するのが訳者のねがいであり努力である。

「主のみ霊のある所には自由あり」(コリント後3・17)

由つて以て本試訳の名となす。

*

第1篇

1 幸なる哉斯かる人、(1)悪き者らと謀略に歩むことなく、

(1)罪人らの道にも立たず、(1)嘲る者らの座にも坐ることのない、

2 エホバの法にこそ彼の歆びがあり、その法を日も夜も想う人。

3 彼は水流のほとりに植えられた樹にも似る

期に及んで実を結び、葉もまた萎れることのない樹にも似る。

だからすべて彼のなすところは榮えよう。

4 そうではない かの(1)悪き者らは、

あだかも風の吹き去る秕糠である。

5 されば(1)悪き者らは審判に立ち得ず、(1)罪人らは義人の集いに。

6 誠にエホバの知り給うは義人の道、(1)悪き者らの道は亡びる。

〔第1篇註〕

(1)「レシャイーム」＝悪き者ら、「ハッターイーム」＝罪人ら、「レーツイーム」＝嘲る者ら、すべて複数形なるに反し「幸なるかな斯かる人」は単数である。義者



が常に悪者よりも少数、否、時に独りであると云う事実をよみとつて可なりと考える。第4節にはこの第1節の「者ら」をうけて、「かの悪き者ら」と謂っている。但し5、6節の「ツァデーキーム」＝義人は複数形である。

1節…接続詞(そして)は時に訳し、時に訳さず、日本文の語調、語勢の上から訳さざる場合が却つて原文に忠実(その文勢の上から、形式の上からではない)なことがある。第1節の「ウ(そして)」は「道にも」「座にも」の「も」と訳出して見た。

2節…「ではなくして」、……にこそと訳せり。

3節…「その期にあたつて」であるが、かかる場合「期あつてか」等と訳すのは文勢の上からであつて、この辺が自由訳の自由訳たところでもある。「されば」すべて(と強く)。

4節…「否むしろ」と訳すとやや敷から棒式の感がある。何となればこの語は前段の義人の栄光ある道に対して、内容的に受けているからである。

5節…(されば)は強い therefore(接続詞)。ギリシア語の「ウーン」に該当する。

6節…(接続詞、……ということ)＝dann for「何となれば」ではどうもしくくりしない。「誠に」と訳す。その意は「それと云うのは本当に……なのだから」と云う原文の気持があるからである。そしてこの(接続詞、……ということ)がwirklich 本当に、まことにと訳され得る場合がかなり多い故である。

*

第2篇

1 何故に国人らは立ち集い、民族らは空しきを謀うのか。

2 地の王たちは立ち構え、群伯は相議り、

エホバとその受膏者^{じゅこうしや}とに反つて言う、

3 「打ち砕こう彼らの械^{かせ}を、棄て去ろうその縄を」と。

4 天に坐し給う者笑ひ、主は彼らを嘲り給う。

5 やがて彼は彼らを怒りてもの言い、憤りてなやまし給うには、

6 「さわれ我はわが王を立てた、わが聖きシオンの山に」と。

7 私^{わたし}は述べようエホバの詔命^{みことり}を、

彼は私に言い給う「汝はわが子、われは今日汝を生んだ。

8 我れに求めよ、国々を与る汝が嗣業^{ゆざり}として、地の極^{はて}は之を汝が有として。

9 汝は鉄の杖で彼らを打ち破り、陶工の器のように彼らを砕こう」。

10 さればいざ王らよ賢^{さとし}かれ、教訓^{おしえ}をうけよ地の審士^{さんし}輩^{はい}。

11 畏れてエホバに仕え、戦きて飲べ、子に接吻^{くちづけ}せよ、

12 「子に接吻せよ」恐らくは彼怒り、汝らは途に亡びよう、その怒はすぐ燃え

たつゆえに。



幸なるかな、すべて彼に依頼よりたのむ者！

〔第2篇註〕

第3節…原文には勿論引用符はないが、内容から付けることにした。以下之に殉ずる。直訳すれば「我々は打ち砕こう」であるけれども、日本語では「我々は」は不要である。つけては不自然である。それ故、かかる種類の代名詞やその他小さな語 (particles など) は時につけ、時につけず。

第4節…「天」は原語は「諸天に」である。

第5節…(接続詞) 〓 Then である。

第6節…この (接続詞) は単なる and ではなく (and) yet 「やれ」である。

第7、8節…言の順序はなるべく原文の通りにしたいけれども、日本文としてあまりよみにくい様なときは勿論日本文の法則にしたがう。さりとて散文的にはしたくないから (原文は詩) なるべく原文の調子に従わんとする。そこで語の順序はある一定の法則にしたがうわけにゆかぬ。その句その句について最もよいと思う次序に従うより外ない。それがまた自由訳の特徴でもあろうか。ただし断じて意訳ではない。さりとてまた逐語逐字訳でもない。

第10節…(接続詞) 〓 されば (and) いづ (now) と訳す。

第11節…原文では「子に接吻せよ」が11節に入って三つおりかさねて言い表わしている。この方がいいと思う。

第12節…「おそらくは……」前節の三句全体を受ける。「……の故に」この理由は内容的に前句にかかるので形式の上からは不自然である。「おそらくは……」以下が11節を受けているから。こんな例はヘブライ語にはかなりある故だ。

*

第3篇

ダビデのうた、その子アブラムから遁のがれたときに。

1 エホバよ、何と増し加わることですか私の仇あだは、多くの者が起こります私に向かつて。

2 多くの者がわが魂に就いて言いますには「神の救は彼にない」と。(セラ)

3 けれども、エホバよ、貴神あなたは私を囲むたて櫃、私の栄光さかえ、わが首こうべを上げたもう方かた。

4 わが声でエホバに叫よばわるのだ私は、彼は応え給うその聖き山から。(セラ)

5 私は臥した、私は眠った、私は起きた、それはエホバが私を支えて下さるからだ。

6 私は怖れぬ、千万ちよろずの者が私をとり囲んで立ちかまえるとも。

7 起きて下さい、エホバよ、救って下さい神様！



貴神はわがすべての敵の頬骨を撃ち、悪い奴らの歯を砕いたではありませんか。

8 エホバにこそ救はある、汝の民にどうか汝の祝福がありますように。(セラ)

〔第3篇註〕

原文(題本の)では「ダビデのうた……」の見出しが第1節となつてゐる(以下すべて如之)。それ故に全体は9節から成つてゐる。これに従つて節をわかつと日本訳(英訳)〔独訳 Luthers Übersetzung は原文通り〕の聖書と節が一致しないため、且つはまた、かかる見出しを1節と見なして本文同様にとりあつかうのは賛成しかねる故に(むしろこの故の理由のために)従来の日本訳通りに節をわけた。ただしかし内部におけるわけ方には時々原文に従わねばならぬことも出来て来ようと思う。2篇の12節の「子に接吻せよ」は11節の終りの一句と見た方がいい例の如き。

第1節:(JHWH)「ヤーヴェ」が真相に近いとは思ふけれども、従来通り「エホバ」と訳しておく。

第3節:(接続詞)は「けれども」。

第4節:I cried unto Jahve with my voice. (Delitzsch)

Laut rufe ich zu Jahwe. (Bertholet)

Laut rief ich zu Jahwe. (C. Kautzsch)

「私の声」と云う意。Delitzsch は之を副詞と見「私の声で」となし、Bertholet と Kautzsch とは更にそれを内容からくんで laut (大声で)となした。私はこれを「わが声よ」と自分の声によびかけて「さあ叫ぼう!」と云つた心の動きを想像したくもある。しかしこの解釈の仕方は何人もやっていない様だからしばらくここに措き、今は“with my voice”に従おうと思う。Kautzsch、Delitzsch 共に之を過去に訳してゐるが之は Bertholet の如く現在がいい様に思う。単なる過去の経験ではなく、「いつも叫ぶるときには聞いて下さるのだ」と云う確信の声だと思う。

第6節: because of myriads of...「多きの故に……」

第8節:前半は独自の詩調。後半は明らかに神へのいのり。

*

第4篇

伶長をして琴に合わせて、ダビデの歌。

1 叫ぶるときに答えて下さい、わが義の神様、困つた時にあなたは居場を(私に)作って下さいました、お憐み下さい 祈りをお聞き下さい。

2 人の子らよ! 何時までわが榮を恥に、何時まで汝らは虚しきを愛み、偽りを慕うのか。

(セラ)



3 だが知れ、エホバは義人を別ちて己の属とし給うたことを、エホバは聴き
4 給う彼に私が呼わるときに。
5 憤れよ、だが罪を犯してはならぬ、汝ら臥床にて己が心の衷に語って黙せ。(セラ)
6 献げよ義の祭物を、依頼めエホバに。
7 多くの人は言う「誰が嘉き事を我らに見せよう」と。聖顔の光を我らの上
8 に掲げて下さい エホバよ。
9 あなたは私の心に歓喜を与え給うたのです、彼らの穀物や新酒が豊かであ
10 った時よりも更に多く。
11 全く安らかに私は臥しました眠ります、それは汝が、エホバよ、
12 私を独りで平安に処らしめ給うからです。

〔第4篇註〕

第1節…「私をおあわれみ下さい」であり、「私のいのりをおき下さい」であるけれども、「私、私」と日本語に訳出すると「私」が強くひびきすぎる。ある場合にはなくてはならぬが、この場合それほどにまで訳出する要なしと考える。原文ではこの節は一片である。かかる場合、一字きげて次行にうつす(以下準之)。
第4節:tremble、zittern(震える)の意、to be angry、zornig sein(憤る)の意とある。後者に解した。「汝ら憤れよ」の意。(接続詞、そして)は「だが」。

*

第5篇

伶長により琴に合わせて、ダビデの歌。

1 ああエホバよ、私の言をお聴き下さい、顧みて下さい私の思念を。
2 留意して下さい私の叫ぶ声に、わが王、わが神よ。〔汝にこそ私は祈るのです。〕
3 エホバよ、朝にあなたは私の声を聴いて下さい。
4 朝、あなたに備えて私は俟望みます。
5 汝は悪いことを喜び給う神ではございません、悪はあなたの側に宿ることが出来ません。
6 驕る者はあなたの目の前に居ることが出来ません。
7 あなたは憎み賜います、すべて邪悪を行うものを。
8 汝は滅ぼし給う虚偽を言うものを。
9 血を流す男と欺瞞る奴とをエホバは憎み給う。
10 けれども私はあなたの豊かなる恩恵によって参ります あなたの家に。



あなたを畏れてその聖殿きよきみやに向かつて私は拝します。
8 ああエホバよ、私をお引き入れ下さい、汝あなたの義の中へ、私には敵が居るの
です。

汝あなたの道を真直まつすぐにして下さい、どうか私の前に。

9 誠に彼らの口に真実はなく、その衷うちは荒すざび、

その喉はあばける墓、その舌を彼らは滑らかにします。

10 彼らを罪に陥おとしれ給え神よ、彼らが己の謀略はかりごとによつて倒れんことを。

彼らを多くの愆とがの故に追放して下さい、彼らは汝に背いたのですから。

11 けれども汝あなたに遁にげゆく者は喜び、永遠に歓喜よろこび叫よばわりますように。

汝は彼らを庇おおい給う、かくて聖名を愛する者が汝にあつて歓びますよう

に。

12 エホバよ、誠に汝は義ただしき者を幸さいわいし、楯たてのように恩恵めぐみを以て之を囲みたま
います。

〔第5篇註〕

第1節…「エホバよ」この呼び掛けは第3字目に位置しているが日本語の語調の
上から冒頭に置く。しかも嘆詞「ああ」を添えた。呼称の場合、かかる詞を付し
て訳するを自然とするときは付することとする。

第2節…原文では韻文の切目の都合上、第3節の頭にきている。節の区分に関わ
りはない。

第5節…(接続詞) はこの場合、「何となれば」の意と思うが邦訳にそのまま新た
にすのは却つて原文の力を削ぐ所以であると思うから訳さない。

第6節…第5節の後半に付して始まっている。それは第5節後半と対句形をなし
ているからである。「血を流す男」と訳した。

第8節…「どうか」と云う語は原文にはないが文勢上挿入する。かかる場合はな
お出て来るであろう。

第10節…「……たまえ」「……ことを」「……ください」と云う様な語の使いわけ
は文字の上からではなく、語勢、文勢から自然に出づるままに用いたいと思う。
訳文はかくして時に文語調を変え、時にやや長く散文的にもなるう。その訳文は
しかし大方いのりの言(口語)を以て表わされる。原文の詩調が、語数が増すた
めに、害われるのはやむを得ない。しかし出来るだけ語数を少なく訳さねばなら
ぬ。全体としてはどこまでも詩的であらねばならない。何となれば詩は散文を以
て訳されては詩の本質にもとるからである。

*

われ靈魂たましひを汝の聖手に託ぬ、



エホバ真理の神よ、
汝は我を贖い給えり。

——詩篇第31篇5節

*

(附) ヘブライ語と私

1926年の春、帝大独文科に入学した時、私はラテン、ギリシヤ、ヘブライの古典語の中何れいずを選択科目の一つとして数えんかと考えた。迷える私を呼ぶものはヘブライ預言者の声であつた。しかしながら力弱き私は幾度たえず佇んでは行手の險しきに恐れ戦おのいたろう。それにもかかわらず、野に呼ばわる人の声を私の耳は欺あざむいてはならなかつた。今もなお思い起こす、石橋智信教授がイスラエル文化史を講じてエレミヤの預言に來たるや、私の眼にあつきものが湧き出でしことを。その夏ヘブライ語は一日も私を離れなかつた。母からやつと戴いた大金をポケットに入れて古本屋の高い棚からあの大きなヘブライ語のレクシコンを卸し得た時の歓びを知るものはわが神のみである。それは恰あたかも私のために備えられたる字引であつたかの如く発見されたのである。(1)エホバ・エレである。旧約に親しみが増してゆくのは藤井武先生のお陰であつたことは言うまでもない。ある力、ある熱が私を曳ひつぱりまた燃やしてくれるのでなくしてかかる語が学べるものではなからう。事実が証明した。十指に余りし始めの聴講者は終ついにすべてその影を消してしまつた。信仰は勉学の力であることは我々の実験の示してくれるところである。藤井先生がいのりを以て日曜の午後一年間御指導下さつたこの語学の勉強はまた大いなる助けとなつた。顧かえりみれば、はや始めてから六年に余るけれども、おのが学力の微々たるを恥ずるばかりである。しかしヘブライ語は私の「初めの愛」である。どうして之を棄てることが出来よう。神、我れを助け給え！

(1)エホバ見給わん、エホバ備え給わん。 創世記22・14

*

いのり (1)

1. いのり以前の問題

さびしきは人である。なぜであらうか。原人アダムが神に創つくられし当初、

「神御自身の像かたちの如く」(創世1・27)

であつたが、彼が単独であつたのは人間の創造の過程における暫しばしの間であるに過ぎなか



った。単独なるアダムの存在、一個としての人間の存在は、人格者としての意義をなさぬものであるらしくあつた。神は之を見て言い給うた、

「人独りなるは善からず、我彼に適う助者を彼のために造らん」(創世2・18)

と。人は神の如く創られたる最高の榮譽を負いながら、神の如く独りあることが出来ないところに、創られた者らしきがあるのである。神といえども数理的絶対の個ではない。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」(ヨハネ1・1)

と言われる神は、その独子キリストと共に「世の創めの先きに」在り給いし神である。キリストは、

「父の懐にいます独子」(ヨハネ1・18)

で在り給う程に父と一つであつた。聖書に啓示されている神は、かの形而上学的の神ではなくして、此くの如き人格的の神である。けれども神は神であつて、その独在の内容は人の思いを越ゆる深きものである。何人も神のこの絶対をさぐり知ることは出来ない。人はその原始において既に相対的なものに創られたのである。人は助くる者を要すべく創られた。呼びかくべき他なる者なくしては在り得ぬさびしさを神は善しとは見給わなかつたのである。このことはしかし、人の価値が相対的なものであると云うことを意味するものではない。アダムよりエバが、男(イーシュ)より女(イツシャー)が出たことを人格の問題から考えるならば、人格は相対的形式のもとに存立することを意味するものである。人がもし絶対に個なる存在であるならば、個性は認めらるべくもない。個性が個性たるを得んためには、個性は他の個性の対立を必然的に予想し要求するものである。個性あつての人格であつて、個性なき人格は考えられない。かく考えれば、さびしきは人格の一特徴であらねばならない。然らばさびしさを宿すアダムは助者エバを得て、満ち足りたであろうか。彼らの人格はもはや何ら求むるところなき全き自足のものであり得たろうか。アダムにもエバにも未だ罪はなかつた。しかしアダムが独りあることが善くないと同様にエバも独り有ることの不適であるは言うまでもない。アダムにさびしきがあるならば、エバにもまたさびしきがあるねばならぬ。一個なるアダムが複数の存在となつて人格の存立は得たけれども、神は一度善しと見給うて創造の手を休め給うたけれども(創世2・1-3)、それにて神は人間と万物をそのなすがままに任せ給うたものではなかつた。神は創りし者であり、人と万物とは創られたるものであつた。つくられたものがどうしてなおも創造主からのちを仰ぐことなくして存在し得るであろうか。泉から迸りたる水がどうしてそのまま泉であることを得るであろうか。かくて思うに、人のさびしきはその最も深き要求においてはいのちを慕うさびしきではないか。アダムがエバを要するさびしきはなお本源的なるものは云えない。さびしきは断じて感傷ではない。永遠の生命を求むる心、人間のいのちそのものの要求、誠にいのちはいのちを要むるのである。

「ああ神よ、鹿の溪水をしたい喘ぐが如く、わが靈魂も汝を慕いあえぐなり」(詩



42・1)

之より本質的要求はあり得ないはずである。いのちがいのちであり得んがための形式が相対であるのならば、動植物もまた然るべきはずであり、また事実彼らも相対の生を営んでいる。しかし人間のいのちはその生物的存在にあるよりも先ず、人格的存在にある。

「エホバ神土の塵を以て人を造り生命の気をその鼻に吹き入れまつり、人即ち

生霊となりぬ」(創世2・7)

とあるは何を物語るか。人が神と霊的交わりの中にあるべきを意味するのでなくして何であらうか。神の霊を授けられたる人が神を離れて霊的、人格的存在たるを得ざるはあまりにも自明のことである。神との霊的交通こそは人格者の存在の第一原理であらねばならぬ。さびしきは、いのちを慕うさびしきであり、永遠の生命とはこの神のいのちを措いて何処に求めらるべきいのちであるか。

暫くここに問題の主題を離れて、神が人を土から創りこれに生命の気を吹き入れ給うたと云う記事について考えて見たいと思う。これは当面の問題とはならないにしても、立場を明らかにし我々の論を進めるに当たって一つの重大なる隅の首石たる役目を果たしてくれるであろうから。創世記第2章はその第4節後半から所謂ヤヴィスト(J)の筆に成る創造の記事とされていて、第1章の雄健なる筆致と壮大なる内容に比してこれは如何にも素朴であり物語風である。然らば我々はこの記事を一幅の絵画的神話として宗教学的にこれを解するにとどめ、歴史的事実と見るは不当のことであろうか。それは真理に背くことであろうか。それが歴史的事実であると考古学的に実証することは恐らく不可能のことに属する。けれども事実なるか否かの前に真理がここにありや否やの問題を考究することが大切である。真理、換言せば価値を有せざる事実は事実であつても我々には関わりなきものとなる故に、この記事に真理を我々が発見し得るかを以て我々の態度を明らかにせねばならぬ。

神が土から人を創つたと云うことは人の存在の半面である生物的存在であることを意味するものである。これに神が鼻より生命の気を吹き込み給うたと云うは、人の霊的存在たるを明らかにするものである。此く人は二元的の存在である。しかも、はじめに霊があつて後に肉があつたのではなく、肉の土台に霊が備えられたのである。此く言えば現代のマルクス主義を奉ずる者、及び享楽主義を謳歌する輩は、採つて以て自己弁護の資に供するかも知れぬ。しかしながら思え、創造の段階を。下等なものより漸次に高等なる生物へと創造の業の進行せし過程を。肉が始めに据えられ霊によつてそれが完成するは余りにも当然の帰結ではないか。聖書は後にキリスト出現の奥義を記すところに、

「血氣の体にて播かれ、靈の体に甦らせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。録して始めの人アダムは活ける者となれりとあるが如し。而して終りのアダムは、生命を与うる靈となれり。靈のものは前にあらず、反つて



血氣のものの前にありて霊のものの後^{のち}にあり。」(コリント前15・44、46)

と云っている。霊は肉を支配せんために後に現れたのである。霊が肉を支配すると云うことは、論理的には霊が肉より先行すると云うことを意味する。人が生ける者となったのは神の気によつてである限り、人間のいのちの問題は肉に関わるのではなくして、神の気即ち霊に関われねばならぬ。されば論者は重ねて言う、人は先ず、霊の存在であることを。神の気が肉であるというならば、神のいのちが肉であると云うならば、即ち已む。論者はかかる生物的、物質的人間とあげつらうを恥じとし不可能と考える。豚の如き人々をして豚の価値を論ぜしめよ。人はまことのいのち、霊のことを問題とすべきものである。

「まず、神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらのものは汝らに加えらる

べし」(マタイ6・33)

とはイエスの重き一言であつた。

かく觀じ来たれば、創世記第2章の人の創造の記事がいかに真理を物語るかを知る。我々が此^かくも速^{すみ}やかにこれを真理と断定するのを人々はあやしむであらう。それは当然である。我々も如上の論を以て真理を論証したとは考えない。しかしながら我々の論は論理を超えた確かさに基づいて進んでいるのである。その確かさの基とは何か。一言にして言うならば第二のアダムの霊である。されば我々は創世記第2章の記事を真理と見、真理と見る限り、我々はその事実性を信ぜざるを得ない。ただし、そこに表現せられたる文字通りに事実がありしか否かの如きは問題とならない。それは文字を儀文と化せしめるものであつて、霊はその文字を活かして読むべきであるからである。聖書はどこまでも細密に研究し解剖されて可い、しかし文字の末に拘泥するものは竟^{つい}に聖書を読み損^{そこ}なう所以^{ゆえん}である。キリストもパウロも聖書(旧約)を読むにはただ霊と真実とを以てしたのであつた。

さて、我らは再び問題の本道に立ち帰らねばならぬ。相對の中に人格の存立を得たところの二人の原人は、人格の本来の要求として絶対的人格者神を求めねば居られないのであつた。それを私はさびしさと称して来た。アダムとエバが相互^{もと}を要むるさびしさよりも本質的なさびしさとして神を求むるさびしさに人の生命^{いのち}の生命たる所以があることを見た。ただしし罪を犯さざりし時のアダムとエバに於てはこのさびしさは意識されては居なかつたであらう。自覚にはのぼつて居らなかつたであらう。何となれば罪を知らざりし時の彼らの生活意識は余りにも新鮮なるあるがままなる生活そのものに溶け込んで居たであらうから。彼らが生くることはさながらに求むることと一如であつて、さびしさはさびしさとして感ぜられては居なかつたであらう。彼らの自由意思が一たび乱用されざりし間は、彼ら相互の会話、神への祈祷、讚美は何と祝福されたものであつたらう。詩人ミルトンの想像は断じて詩的空想ではなくして、あるべくしてありし人の生活の真実なる表現である。

翻つて我々は今ある、現実の我々の状態を考察しなければならぬ。ここにもまたさびしさの要求を見る、潜在的に或いは顕在的に、それはあまりにも著しき現実の姿であらぬか。



赤児の泣く声に我々は何を聴くか。赤児は己が空腹や母の不在等を意識するや、ただ泣きに泣くのである。彼らにも意思の衝動はある。彼らは意思表示の形式として未だ言語を有せざるも、泣くことは正しく彼らの唯一の意思表示であり、言である。泣く声は音ではあつても、泣き声自体ではそれが何を意味するかを何人も知る由もないけれども、その直接にして切実なる声は、母親の心にせまり、赤児が何を求むるかを直覺せしめんとする。我々はこの事実を見通してはならない。即ち赤児の泣くは、全身全霊のわざであつて、いのちそのもののさびしさの要求に根ざしていることを。かくも原始的なる赤児の泣くことそのことに、いのり以前のいのりがあるのではないか。いのりの本質的なものが胚種として存在しているのではないか。然らばその本質的なものとは何であろうか。そはいのちのさびしさのまことの願望である。赤児の泣くは遊びごとではない、いのちがけの求めである。まことなる願望である。而してこのまことの願ひは、その対象として必然、少なくとも主観的にはまことなるもの、換言せば全幅の信頼をなげかけ得るものであらねばならぬ。赤児の場合に於ては、この対象は母親である。

斯く言の始めが赤児の泣く声にあり、赤児の泣くのがいのり以前のいのりであるならば、言はその本来の使命としてのいのりのために生じたものではあらぬか。神の氣によつて生けるものと成りし人間が、永遠の生命を求めての神との人格的交わりに、人間の自由なる意思表示として、正に言の使命の本来なるものがあるのである。然るをこの本来なる交わりを人はいつしか忘れて、人と人との交わりにのみ言の存在する意義あるかの如くにしてしまった。人間生活の実相を見よ！ 全人格のまことの意味表示がどれほどであるか。純粹なるべき言はどれほど純粹さを有っているか。泣く赤児の声のみが純粹であるのか、片言混じりにも言う幼児のみがおのずからなるまことの言を語るばかりか。さりとてあまりにも悲しむべき現状である。

「誠にかれらの口には真実なく、その衷は荒び、その喉はあばける墓、その舌を彼らは滑らかにする」(詩篇5・9)

のである。彼らはまことの言を失つてしまったのであるか。まことの言の隠れたる深い泉であるところの一つのさびしさの要求は、いのちの願ひは人には失せてしまったのか。否、そうではあるまい。たとい、われはさびしからずと言う人ありとも、その人はさびしさの何たるかを知らぬものであるにすぎない。白痴、狂人の如き誠にあわれむべき人々であらざる限り、人はさびしさを自覺すべきはずのものである。さびしさは人である。さればこそ人は語らずには居られぬのである。語るけれども語る言にいつわりの刺が宿り、語るけれどもその語らいによつては満たされざる坑あるはどうしたわけであろうか。彼らは友を求めて、見えては胸襟を打ち開きて語らい、別れては書信を以て相慰めんとする。そは美わしきことである。けれどもそれにて坑は満たされたであろうか。否、さびしさはどこまでも人を追う。人は竟に人の心を全く満たしてくれないのか。否、人と語ればさびしさは



いや増しゆかんとするか。然らば我は我が心に自語するの外なしとなし、或いは独語体の日記をつづり、或いは詩文を草して、独り鬱^{うつ}を封じ義憤を燃やし、さびしさをかこつのである。ここに魂はより、いつわりなき姿に帰り、言はより、純粹なる形をとる。これまた美しきことである。しかしながらこれのみにては、なお一つのを欠く。人に語るも、己れと語るも、さびしきはなおつきまとう。これらの試みは、それがいかなる形に表されようとも、われらの言が人か己れにのみ向けられている限り、

(1) 「見よ、すべて空^{くう}にして、風を喰^くうものなり」(伝道之書1・14)

(1) 「風を捕うるが如し」では訳が弱い。「風を喰う」である。

である。人はいつまで風を喰いて生きんとするのであるか。靈魂は痩せ細らざるを得ようか。しかし上述のたぐいの人は、兎^とまれ義しき道を辿っているのである。相對の世界から絶対の世界に進まんとするの動向を取っているのである。

(2) 「善き人は暗中の模索にあつても義しき道をよく識っている」

(2) “Ein guter Mensch, in seinem dunkeln Drange,

Ist sich des rechten Weges wohl bewußt.” (Goethe : Faust 328-329)

のであろう。けれどもあの、

(3) 「はてさて、己は哲学も法学も医学もあらずもがなの神学も熱心に勉強して、

底の底まで研究した」(森鷗外氏訳)

(3) “Habe nun, ach! Philosophie,

Juristery und Medicin,

Und leider auch Theologie!

Durchaus studirt, mit heißem Bemühn.” (Goethe : Faust 354-357)

と云うファウストが如何に衷^{うち}に訴え、外に搜^{もぐ}るとも、ある一つの門を見出して上に昇る道を発見するのでなくしては、さびしきは満たされず、渴きは癒されないのである。ある人がオランダに入りて嘆いて、

(4) 「水、水はいたるところに、さわれ一滴の飲むべきぞなき」

(4) “Water, water, everywhere, but not a drop to drink”

と言ったとか中学の英語の教科書で学んだことを思い起こすのであるが、己れをめぐりて人はあれども訴うべきの人はなく、わが衷に呼びかくるべき心はあれど、さびしきは我と我が身を喰わんのみ。ここに於てか、多くの人は自らの声をごまかして安価なる楽天主義に身を売り、ある者は砂の上にうち築かれたる処世道德の城に立て籠りて自らを安しとし、ある者は勇敢にも空中に樓閣をうち立てて、(5)超人の哲学に魂を狂わせ、ある者は世をはかなみて山に遁れ或いは自らその身を害い果てる。

(5) Friedrich Wilhelm Nietzsche (ニーチェ) の輩を指す。

之すべて人のいかに弱き者なるかを実証するものでなくて何であろう。さびしきは厳として一つの実在である。



文化を好むところの近代人は、かのデルフォイのアポロン神殿の壁にある無名の手が記したと云う有名な一語

(6)「汝自らを知れ」

(6) γνῶθι σεαυτόν (グノーティ・セアウトン)、

英 Know thyself 独 Erkenne sich selbst.

を須らくわが問題として真剣に考うべきである。そのためには談話も書簡も感想も日記もすべてを一度うち棄てて、然り、おのがペンをなげうち、おのが唇を固く緘^{かん}して、しずけき人影なき森の陰、野の隅に出で、わが身も魂もほうりだして見よ。汝は、否、私はそこに黒き己が姿を見たのである。さびしさの要求が正しき要求として求められんためには、どうしても通らねばならぬ門を発見したのである。

然るに同じく野に出で、ある人々は直ちに自然と語った。彼らは人の語らざる言を自然から聞くものの如く感じた。沈黙の自然には偉大なる言が蔵せられているのを知った。彼らはこの神秘的なる声を聞いて、或いは己が心を魅する如き自然のささやきに慰められて自然の前に拝跪した。彼らはやがて自然に於て神を見ると悟った。この神と融合せんと彼らの心は奇しくも昇つてゆく。神即自然、自然即我との方式のもとに彼らの切なるねがいは満たされ、さびしさは医^いされてゆくが如くである。宇宙心と融合せんとする驚くべき希求である。彼らはやがて神となるであろう。自然と人との交わりに於けるこの種の体験に深き消息あるを我らは知る。しかしながらあやまつてはならぬ。こは畢竟^{ひつぎよう}、己れを神にまで高めてしまうところの悪霊的(デーモニッシュ)の魂の衝動から生ずるものである。ヨハネの言うところの迷^{まよ}謬^いの霊(ヨハネ第一書4・6)に外ならぬ。サタンの世界にてはこれが救いであり、之より深き真理はなく、これこそは文化人の最高の姿であろう。

(7)「我は基督なり」

(7) "Ich bin Christus."

とまで叫んだルッターの真理の霊(同上)と似て非なるものにして此くの如きはない。一つは小我を純化して育てつつ大我に至ると云い、他は己れを否定し殺してしまうと云うにある。カトリック教、及び単なる理想主義的思想は前者の方向をとり、真のプロテスタント主義のみ後者である。

然らば黒き姿を発見した者の潜^{くぐ}らねばならぬ門には何と示されてあるのか。詩人ダンテがいみじくも告げてくれる。

「我を過ぎて憂愁の都へ

我を過ぎて永劫の憂苦へ

我を過ぎて亡滅の民のうちへ

正義わが高き造主を動かし

神の力、至高の智慧



また本原の愛我を造れり
永劫のものほか我より前に
造られてしものなく、我は又永劫に続く。
一切の希望を棄てよ、汝らここに入る者。」

(『神曲』地獄篇、第3曲冒頭、中山昌樹氏訳)

“Per me si va ne la città dolente,
per me si va ne l'eterno dolore,
per me si va tra la perduta gente.
Giustizia mosse il mio alto fattore;
fecem la divina podestate,
la somma sapienza e l' primo amore.
Dinanzi a me non fuor cose create
se non eterne, e io eterno duro.
Lasciate ogni speranza, voi ch'entrate.”

Inferno: Canto 3,1-9

此くの如き死の国へ一たび降らねばならぬのが黒き影の運命である。当然の果である。黒き影とは何か。言うまでもなき罪！ 罪の實在を発見したことは悲しみの極みである。何となればそれは肉体の死のみならず、それよりも遥かに重大なる靈魂の死をその果として結ぶからである。

「死の刺は罪なり。罪の力は律法なり」(コリント前書15・56)
であり、「律法は靈なるもの」であるからである。

(8)「あわれ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ」(パウロ、
ロマ7・24)

(8)ロマ書に於けるこの告白は救われたるパウロの声ではあるが。

と心から発せざるを得ざる人となつたとき、彼は本当のさびしきを知り、求むべき対象が外にも内にも絶対になく、ただ上にあることを発見したのである。彼のさびしきの要求は、いのちの願望は確かに義しき路に、来た。罪の自覚がいのりへの出発点であり、死の門がいのりの本界への入口であることを知った。

アダム、エバは自ら罪を犯さざりし時、彼らのさびしきの要求、いのちのねがいはまことのいのりとして直ちに神に向けられていた。彼らはそのさびしきをすら自覚することなしに。楽園とはかかる、(9)存在(あり)と当意(べし)との一致せる世界であつた。

(9) Sein und Sollen, to" be" and "ought" to be.

然るに自由意思の大過によって彼らは楽園を追われた。人々は迷いて神を求むる心、いのりの心を喪失した。ただ罪に泣くまことの魂のみが神にいのりことをなし得た。正しき



道に於てされざるいのりもいのりである云うのであるならば、^{いわし}鯛の頭を拝するいのりから、木石を拝むいのり、拝金、拝健、等々拝大自然に至るまで、偶像崇拜のいのりは枚挙に遑^{いとま}なかるべく、いのりに就いて論ずるは無用のわざであろう。ああ、人の心の渦は何を求めているのか！

「エホバ天より人の子をのぞみて

悟る者神を尋ぬる者ありやと見給いしに、

みな逆^{そむ}きいでて悉^{ことごと}く腐れたり。

善をなすものなし一人だになし。」(詩篇第14篇3節)

*

「眠りなき夜のため」上巻(1) ヒルティ―原著

Carl Hilty: Für schlaflose Nächte, I. Teil, 1919.

10月6日

基督教はつねにそれ自体全く健全なるものであらねばならぬ。かくて半は^{なかば}治癒を求めつつ、半は手足纏^{まと}いとなりつつ、絶えず基督教に推し迫つて来る凡ての不健全にして病的なるものを征服し得ねばならない。

そのことが本当に、キリストがあのようにしばしば彼の弟子らを避け給うて、ひとり山にあつて新しき力ぞえを希^{もと}求め給わねばならなかつた理由^{わけ}であつたのだろう。

精神的に特に不健康なる人々の群が、つねに犇^{ひし}めき集うところの形式的「祈祷治療院」に至つては、なおさらのこと道に悖^{もと}れるものである。此くの如きをつづけて永きに亘^{わた}るならば、何人^{なにびと}と雖も害を蒙^{こうむ}るに至る。

10月7日

人一たび全く愛の国土に踏み入るや、此の世は、かくも欠けたるものながら、なお且つ美^みわしくまた豊けくなるのである。この世はげに愛のための機会のみから成り立っているからである。

10月16日

* 信実^{まこと}〔独 True、英 Truth〕は実に最も美わしく、最も重要な性質である。信実は動物をすら高めて、それを有する動物をして殆ど人間の価値と尊厳にまで昇らしめる。一方この信実を全く欠くときには、才気が如何に満ち、教養が如何に高き人と雖^{いえど}も、それは危険なる獣にすぎない。

* 「信実」〔トロイエ(独)、ツルース(英)〕はなお真実、忠実、貞節などと訳され得る。カントの所謂「善意志」である。「善意志」は哲学的に厳密に考えられ



たる概念であるが、常識的には「信実」と云われる。

10月21日

ヨブ記参照。概要。ヨブが何人^{なにびと}よりも先ず内心の平安を得たのは、彼が如何なる状態に立ちいたるとも神を友として硬く保持せんと決意するに至ったからである。しかしこの決意を彼は、自ら神を見奉るに先だち、なお全く信仰に於てなさねばならなかった。然らずんば彼は己れの苦^く難^{かん}から害なくして脱することは出来なかったであろう。かくて彼はたとい彼が目^めを以て見ずとも、世界の全統御に於ける神の義を善き人にも悪しき者にもはや疑うてはならなかった。そして彼は最後に己れ自身の苦難に関して、神意がここにもまた在ると云うより外に何らの説明を得ずして、その苦難が神から来たものであり、ともかくも彼の救いになるところの何ものか善なるものであるとなして、これを内的に信受せねばならなかった。神の義に対するこの絶対服従がなさるや——或る註解者が正当にも言う如く——

「この試練を経たる忍苦者に対して、神が恩恵を惜しみなく表示されることを妨げる何ものもはや存在しなかったのである。戦いは戦い果たされた。かくて勝利の賞は彼に与えられて不可なかつたのである。」

彼を誤解して等閑に付したる人々や、また所謂友人らを義とすることは、神が後ほど救いの内的に高められたる、義とせられたる者「ヨブ」に、更につけ加えて備えたもうたのである。彼自らはそのために思い煩うを要しなかつた。彼はむしろ、彼らが彼を捜し求め、彼の執り成し(代願)を確かめるように、(1)神が彼らを強い給う如き最も願わしき立場に到達したのであつた。彼のこの執り成しなくしては、彼らは神に赦されなかつたのである。斯くの如きことは今日もおししば起こるのである。

〔註〕原文にして強めてあるところは圈点にて表わせり。次号もすべて之に準ず。

(1)「エホバ是らの言をヨブに語りたまいて後、エホバ、テマン人エリパズに言いたまひけるは、我なんじと汝の二人の友を怒る。其はなんじらが我に関て言いつたべたるところは、わが僕ヨブの言いたることのごとく正当^{ただし}からざればなり。然ば汝ら、牡牛七頭、牡羊七頭を取りてわが僕ヨブに至り、汝らの身のために燔祭を献げよ。わが僕ヨブなんじらのために祈らん。われかれを嘉納^{うけい}べければ之によりて汝らの愚を罰せざらん。」(ヨブ記42・7〜8)

10月31日

〔1517年10月31日、宗教改革記念日〕

ルカ伝第11章36節

「もし汝の全身明るくして暗き所なくば、輝ける灯火^{ともしび}に照らさるる如く、その身全く明るからん。」

我らの衷^{うち}に起こる最善にして決定的なるものは、概していつも電光的性質を有っている。即ちそれはある別の世界から臨む恩恵の一閃^{いつせん}であり、光明の一輝であつて、大かたはただ



に一つの洞察であるのみならず、積極的行動への一つの刺激である。そこでこれが決意を同じくすみやかにし、その決意を直ちに実行に移すことは人間にゆだねられたる事柄である。然らずんばこの恩恵の閃光(グナーデンプリック)は消え去ってしまう。我々がこの恩恵の決意を把握するならば、それは金色の翼をもてる鷺あるを知ろう。常ならば越ゆべからざる障害をも越えて我らを力強くも高揚せしめるのである。天国への道は正にこの全く独特なるものであつて、学習の普通の法則によつて残りなく測定されるような途ではないのである。しかしこのことを経験しないものは、これを信じようとはしないのである。

*

(I) 「最早自己を見まじ、その健康に拝跪^{はいき}すまじと決意した。と同時に私は忽然として元気付いた。元気づくと同時に、他者の他力は私の上にも、厳として如実なる力であつた事を知つた。一切が彼の誘導によるものの如くにみえた。」(三谷先生)

(I)は訳者の挿入。真の決意はそれが上から強いられたるもの、不可抗力的神の力であることを経験する。然らざる決意はまことの実行を伴うことが出来ない。まことの意志は天来の意志であつて、人の意志の自由は罪の故にすでに失われている。

*

Laubfall

らくふふ
落葉

I. Der Spätherbst streift durch Berg und Tal;

Die roten Blätter fallen;

Die Vögel schweigen überall

In diesen Waldeshallen.

1 更けゆく秋は山また谷にたゆたい、

木の葉紅^{あか}らみては落つ。

鳥は啼かずいづれの隅にも

いの森のひそ間^まの。

In kurzem decken Reif und Schnee

Die buntgefärbten Wälder.

Wie sprichst du diesmal sonder Weh:



Ach käm es doch noch bälde?!

やがて霜と雪とはいつむらと
綾なす杜を。
如何にこの度は嗟嘆なく汝れは曰つ、
「秋の暮などかくは遅く来たり」。

Dem eignen Wesen ward ich feind,

Es ist dahingegeben;

Jetzt kommt der Tod, ein ernster Freund,

Nach ihm das Leben.

生まれながらの性に我は敵となりぬ、
そのものは明け渡されしなり。
今や来ぬ真剣の友なる死、
死ののちにぞ生命は来たる。

II: Dein Wille ward mein Wille, auf Unrast folgte Stille,

Der Geist ging ein zur Ruh.

Was los war, ist gebunden, was fehlte, ward gefunden,

Ein Hauch des Lebens spricht mir zu.

2 汝が意志はわが意志とはなりぬ、不安は平安に。
たましいやすらい
靈魂は平静に入りぬ。
解かれしものは結ばれ、失われたるは見出されたり、
いのちの息吹ぞわれにはささやく。」

〔この一篇いかに近日のわが感懷を代言するものか。……感謝。——訳者〕

*

「星のたより」(1)

先びとの国ことばにうつせしかを

知るもまた識らざるも、

われはただ我がみぬちより

出づる言もて意をうつし、

かかるしらべを奏でたるうた人と共に

うたの翼にのりてその現実を



のりこえゆかんと

同じ心の人々と共にせんとねがう。

*

(其一)

「人生のうた」——ロングフェロー (米国) (1807.2.27 ~ 1882.3.24) ——

“A Psalm of Life” by Henry Wadsworth Longfellow

Tell me not, in mournful numbers,

Life is but an empty dream!

For the soul is dead that slumbers,

And things are not what they seem.

言ひ勿れ悲しき調へに

『人生は槿花一朝の夢!』と。

魂も睡めば死し

見ゆるものは真相に非ざれば。

Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal;

Dust thou art, to dust returnest,

Was not spoken of the soul.

人生は眞実! 人生は厳粛!

塵芥いかに終結なるらん

『塵もいかに塵に還る』

それは霊の謂にはあらず

Not enjoyment, and not sorrow,

Is our destined end or way;

But to act, that each to-morrow

Find us farther than to-day.

楽しみも悲しみも

わが命数にも道にもあらず、

道は実践にあり、明日の吾れは



今日の我れを乗り越えてゆく。

Art is long, and Time is fleeting,

And our hearts, though stout and brave,

Still, like muffled drums, are beating

Funeral marches to the grave.

芸術は劫く、時代は流る、

われらが心臓はよじ堅くして勇むとぞ、

音もなき鼓の如くつねに奏つ

墓堂にいたる埋葬の曲を。

In the world's broad field of battle,

In the bivouac of life,

Be not like dumb, driven cattle!

Be a hero in the strife!

この世の戦の広き場にて、

人のいのちの露宮の野にて、

もだしつゝ駆らるる牛馬たらざれ、

戦闘の丈夫たれよ！

Trust no Future, how'er pleasant!

Let the dead Past bury its dead!

Act,—act in the living Present!

Heart within, and God o'erhead!

樂しかる後の日をたのむ勿れ！

逝きにし死をして死を葬らしめよ！

働け！ 働け生ける今！

衷に心あり、上に神あり。

Lives of great men all remind us

We can make our lives sublime,

And, departing, leave behind us

Footprints on the sands of time;

偉人の生涯を想いては



われらが生を崇高になし、
離^{わか}れるるに臨みて我らはあとに
足^{そく}跡をとどめん、時の砂漠^{さばく}に。

Footprints, that perhaps another,
Sailing o'er life's solemn main,
A forlorn and shipwrecked brother,
Seeing, shall take heart again.

足跡、そはおそろしく兄弟^{は兄弟}の、
人の世のおどろかなるわたつみを漕ぎゆきし人の。
そを見て寄るべなき難破の者は
再び勇み振り起^たつらん。

Let us, then, be up and doing,
With a heart for any fate;
Still achieving, still pursuing,
Learn to labor and to wait.

うや我が起^なげしを為^なしてつげん
すべしと耐^たてる心もつ。
愈々^{いよいよ}達^たつては愈々求め、
働くを望^{のぞ}む、待つを望^{のぞ}む。

*

(其2)
「矢と歌」——ロングフェロー——
Longfellow: The Arrow and the Song

I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For, so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight.

われ空に放てり矢を一つ、
そは地に墮^おちぬ、何処^{いずこ}かは知らず。



いとも疾く飛び去りて、眼の
その跡を趁つべうもなかりけり。

I breathed a song into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For who has sight so keen and strong,
That it can follow the flight of song?

われ空に吹息けり一つの歌を、
そは地に隕ちぬ、何処かは知らず。
誰が眸が鋭くまた強からん
うたの翼に追いつくほどに。

Long, long afterward, in an oak
I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.

永く永く時を経て、一本の櫓に
われは見出でつ、かの矢折れでなおのこれをを。
またかの歌を始めより終りまで
われは見出でぬ一人の友の心にぞ。

*

〔第一信〕——ある音信より——〔10月18日〕

『いかに塵の世を立ち超えし愛でたさのありて、今日わが身をば主に近く高むるも
のか、ただ人の歩みにささえを築く人ありとせばわざわいなるかな』

「樅の日記」(1)

1918年11月23日～24日

薔薇の花にそのかおりあるごとく、
この人の心にあるセンスあるらん。



Easter '21.

Likewise the Sprit also helpeth our infirmities:
For we know not what we should pray for as we ought:
But the Spirit itself maketh intercession for us
With groanings which cannot be uttered.

——Romans.VIII.26.——

1921 復活節

斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。
我らは如何に祈るべきかを知らざれども、
御霊みずから言い難き歎をもて執成し給う。

——ロマ書第8章26節——

「樅」の聖書の葉に

記されてあるこの聖句にもまして、

「樅」の心をあらすものはなかるべく、
その生涯を語るものはなからう。

*

「樅の日記より」(1) 序(編者)

「」符は編者の註

聖書と偉大なる書籍とは私の生涯の友であらねばならない。その外に私はここに一つの
手離すことの出来ない書き物を有っている。それはこの「樅の日記」である。これを繙く
ごとに私は活ける人の親しき言を聴くの想いである。然り、彼は今も勿論生きてゐる、こ
こよりはもつといい国に。「清き岸辺に」て相会う日まで信仰によりて語り、共に俱に聖名
を讃えつつ前進するであらう。

恩師藤井武先生の、私がここに樅と称える此の人について書かれし文字を、次に記そう
とするのであるが、どうか読者よ(もしこの『羔』に読者あらば)、其の箇所を(1)「唯見て過
ぎて」いただきたい。

〔註〕(1)ダンテの言

「小池政美君は稀に見る純なる人格であつた。私が君を識つたのは僅かに君の地上に
於ける生涯の最後の二年間に過ぎない。しかし私にとってその記憶は永久的である。
君の人格には或る意味に於てイエスの香いがあつた。ガリラヤ湖または橄欖山の如き
背景に適わしきものであつた。」



「君は或る意味に於て悲哀の人であつた。君の信仰はただ感謝々と叫んでよろこび躍るようなたちのものではなかつた。君にはいつも深みがあつた。しかしまた深みの中に言いがたい豊かさがあつた。……君の「信仰」は特に貞潔のそれであつたと言いたい。……君は近代人の腐敗しきつた情性を遙かに見下して、曙の明星のごとく輝いた。」

「幸なるかな心の純き者、その人は神を見ん」(主イエス)

日記はいのりの心持を以て神の前に我れと我が身に語りつつ書くものである。内容の上からは人を相手とすることは勿論あろうけれども、日記を書き記す事それ自体は絶対に自語独白であつて対話ではない故に、独特の世界である。この独特の世界に於ける唯一つの対話者は神あるのみである。それ故に日記に於ては最も純粹なる、あるがままの言を見る。私がここに載せようとするのは日記よりであつて全部ではない。

わが樞は自分の日記を私に読まれようとは夢にも思わなかつたろう。況して此くの如きことをされようとは。天の樞よ、どうかこの愚を赦してくれ。ただこれが真理の真実なる証しの一つともなるのなら、どうかもう一度私のため犠牲となつてくれ。

(1932・11・3、編者、残樞生)

*

「樞の日記」 序

恵み深かりし旅の日を了えて東京に帰つてから既に12日になる。12日の間に世界は全然変わってしまった。新渡戸先生のお辞を借りれば、*1918・11・11午前5時を以てModern age は New age になつてしまった。また同じ12日の間に、もうお顔を見ることの出来ない方が我等の身近に起こつてしまった。大関先生(当時地理学界の中堅、輝かしかるべき将来ありし学者、気骨稜々たり、惜しみて余りある人なることを私は兄から聞かされた。)は1918・11・14午後2時北海道釧路で従容と死に就かれた。一は喜である、一は悲である。喜は世界の喜であり、悲は自分一人の悲にとどまる。しかし何れも大いなる出来事であつた。忘れられぬ出来事である。……12日の怠慢は明瞭なる12日の怠慢としておきたいと思う。なるべくはこんなブランク(白紙)はもう欲しくないものである。毎日毎日を規則正しく暮らして行けば日記をつける時間はあり相なものではないか。

*〔文庫編者註〕 第一次世界大戦(1914/7/28 ~ 1918/11/11)、1918年11月11日午前6時、ドイツは連合国との休戦協定に調印。同日午前11時、発効。

……スケジュール[schedule 表、箇条書き]にまとめて見ると大いなる出来事は大関先生の御逝去と世界平和とである。注意すべき事は内村先生の講義である。三つの事は明白に



かかねばならぬ。小さな事としては腫物のあとしまつ、桐法会〔高師附属中学出身者にして帝大法科を卒業したる者の会〕、ピクニックがある

——11月23日

*

○1918年11月23日 (新嘗祭)

昨夜は晩おそかった、寝たのは2時であつた。但しそのお陰で三十頁の行政がすんだのであつた。今日はまたまたそのお陰で目の覚めたのは8時すぎ。……おば様は御快諾下さつた、空は本当に美しかった。水は昨夜の雨で大分汚れて居たけれども量は大きかった。土の黒さと生き生きした大根の緑とが美しかった。小さな櫟林くぬぎもよかった。何も彼も実に美わしかった。よき三時間の散歩をして帰る。

帰ると(〇〇)さんが来ていた。何となくふさぎ込むが故にやつて来たと云つて居た。僕の心は何故か普段の親切に帰る事が出来なかつた。恐らくは思ふ程のHilarity(ヒラリティー)〔陽気、愉快〕を得られずに〇〇さんは帰つた事だろうと思う。少し気の毒なという気がする。気の毒と云えば〇〇さんはスリー・ホームズ〔三家庭〕と云う有名な家庭小説〕の中、マーチン・アラーバイ〔Martin Alarby〕が一番好きの様である。人間の眼には幸福に見えるかも知れぬ。ただ僕はラルフ・ダグラス〔Ralph Douglas〕が好きである。試練を経て来ているという事も一因かも知れない。しかしその外にも何ものかが僕を引きつける。〔ダグラスは男らしいまた情の深い少年であつた。ラルフ兄弟(弟をクリスティー Christie と云う)の事を想うとき、私は言い難きものを感じる。良き小説は道德書類の表し得ぬ美わしきあるものを与えてくれる。詩や小説はそれ自身真理を表現しているときに、聖書の最もよき註解の一つである〕

.....

ピクニック、15日に〔神田〕十拳君に会わなかつたので16日にはピクニックなきものと考へて居た、ところが16日になると不意に行こうじゃないかという事になる。その日は前夜の桐法会がたつて10時10分前に起床し、十拳君の「外交史」を返さんがために朝食をぬぎにした日なので大いにまごつかざるを得なかつたけれども、よき天気ではあり、正ちゃんを少しでも慰めたかつたので、やつぱり相談合あひの上出かけることにきめる。正ちゃんの都合もよかった。堤——大宮八幡——堀ノ内、あげまん——十拳君——おそば。もう武蔵野の秋は酣たけなわで、初冬は将まさに来ようとして居る。櫟くぬぎの林は美しい。林の中で一枚撮つてくれたけれども、うまく写つたかしら。済美学校の中へも入つて見た。よき池があつた。星を仰ぎつつ、「……」に君の勉強は実に贅沢だと言いつつ帰る。翌日驚くべき速度を以て「注意した効ききめがあつたと思ひになる日が近い内に来る様に致します」という手紙を得た。僕はこのいと早き手紙のBedeutung(ベドイツング)〔意味〕を大ならしむる術すべを知らない。……



○1918年11月24日(日曜)
朝ルカ伝を読む。

日本訳には、主の言を信ぜし者は幸なり、とある。改訳には、信ぜしものは幸なる哉とある。英訳には、

And blessed is she that believed.

とある。ただ独逸訳だけは

“⁴⁵ Und glücklich ist, die geglaubt hat; denn es wird erfüllt werden, was
ihr vom Herrn gesagt worden ist.”

「信ぜし者は幸福なるかな、主の語り給ふことは必ず成就すべければなり」(ルカ1・45)

とある。僕にはルカ伝第1章45節は独逸訳が好いと思われる。「この独逸訳はルーテル訳である。この訳は「信ぜし汝は幸なるかな……」と第二人称を用いている」。エリザベスは

Behold the housemaid of the Lord: be it unto me according to thy word.

(Luke, 1:38)

「視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく我になれかし」(ルカ1・38)」

と言いだしたマリヤを讃めたのである。心の正しき人は談の相手を讃めるのに一般化した讃辞を使わねばならぬ遠慮はいらない。思うがままに我が心を発露せしむるを以て足る。エリザベスには甲をほめんがために甲をほめ切れず「甲をほめ得ずと同義」、一般的甲をほむるに出すべき言を用うる程に他人の善に対する嫉はなかった。彼は目の前の我が姪に心からの祝福の声をあげたのである。しかしこの詮索だては小事にとどまる。ルカ伝第1章45節は単純なる一行ではない。ルカ伝第1章の一部である。ルカ伝の一部である。ルカ伝第1章の意義は何、ルカ伝は何という所まで早く行かねばならない。もつともつと勉強しなければならぬ。

午、浅はか町〔浅嘉町の事〕へ行く。つかれたとは言いながら、お客の前で足を出した詫にである。或は僕の真意は軽くとられすぎたかも知れない。

青年会館へ廻る。

腓利門書の続講である。前週のととも、まとむべきよき場所の様に思われるから果たしてうまく出来るかどうか判らぬが註解を試みて見る。

先生の議論は単なる腓利門書の講義ではない、聖書全部神言説の立場に於ける夫である。題そのものは大きくない、しかし言わねばならぬ事は多く、深い。

〔以下ノート12頁にわたって講義の内容が認められてある。これが内村先生のものであると云う立場からはここに載せるべきでない。しかし樞の日記の一部と云う見地、並びに言通りの筆記ではなく、筆者の気持が読み得る立場から、次号に載せるつもりである。〕



*

「みどり葉」(1)

残縦

然^{しか}はあれど昼はエホバその憐憫^{あわれみ}をほどこし給う。
夜はその歌われと共に在り、
此のうたはわがいのちの神にささぐる祈りなり。

——詩篇第42篇第8節

1927年秋〔5年前に詠みしもの、筆を加えたり〕

1 聖手により大浪小波乗り切りて目指すはかなたの岸高き国。

2 人はいね夜は更けにけりわれ独り夜明け待たなん灯火^{ともしび}の下^{もと}。

——9月22日夜

3 語るべき友のなければ筆執りて何ごとか書く祈りに寄せて。

——東北の友に

4 月の夜や母思うこの心には秋のあわれぞいやまさりゆく。

——失明の母を想いて

5 酒槽を独りにて踐^ふむ「羔」の此の雄編を繰返し読む。

——恩師の詩をよみて

6 独り坐^{そら}し天を仰ぎてものすなりわが歌ごころ秋空よ知れ。

7 戦いて完膚なきまで傷^{きず}くも戦^{たたか}い避くるな男児^{おのこ}にしあれば。

8 わがために勞せし母の来し方をみ顔の小皺に見るこの胸は。

9 生きながらわが顔知らで去りぬべき母を想^{なみだ}えば泪止まらず。

10 言い難きこと多からん母君の胸中^{みぬち}しのべば悔いぞ多かる。

11 コスモスよ聖国来らば母上を心ゆくまで咲きて迎えよ。

——庭のコスモスを見て



12 ただ一つわが歩むべき道であるさわがしからぬ愛の細道。

13 亡き兄と光を見ざる母君を思えばわが在る意義深きかも。

14 わが師をばなお幾年も苦しめん讃歌を思いてみ名をし呼ぼう。

15 池の端に傘さし来ればその面に雨脚躍りて玉はしりたり。

——10月28日

16 夕暮れて森の細道帰るわれ歩くを好みし兄をししぬぶ。

17 二羽の鳩隣家の屋根に降り立ちぬその翼の色真白なりけり。

18 夕まぐれ森さわがせて白雨の近よるけはい風かとも思う。

19 月を見てああわが友と呼びし声虚空に消えぬききたるや君。

20 夜もすがらわれをまもりてまめやかに月の光は照らしけるかも。

——2月10日、戸を閉ざでねむる

21 とく起きて幾朝われは星を見しまたとなからん預言書の秋。

——曙の明星を見し秋

22 何人が弾ずべかりし古き琴の歌調に高し東洋のそら。

——先生の詩のこと

23 人類の永き眠りを破るべき讃歌の力のおごそかさかな。

——先生のうたのこと

24 うつし世の恋と宝を塵と踏むシユラミの処女幾人がある。

——雅歌書をよみて

11月13日朝 摺筆

*

斯くてかれらスコテより進みて曠野の端なるエタムに幕張す。

エホバかれらの前に往きたまい、昼は雲の柱をもてかれらを導き
夜は火の柱をもて彼らを照らして、昼夜往きすましめたもう。

——出エジプト記第13章第20、21節



*

〔参考〕

次に、著者が「羔」誌について言及している文章を著作集から拾う(小池辰雄文庫編集者の註)。

○著作集第3巻『無の神学』第2部「無の神学への道」第1章「祈りの宗教哲学」より

〔附記〕

この「祈りの宗教哲学」(「羔」第2号)の前に「祈り以前の問題」(「羔」第1号)という論説を書いた。それがどうも見当らないのが残念である。実は毎月、論説や随想や翻訳や詩や和歌や聖書解説などを原稿用紙六、七十枚書いて、これを糸でつづり表紙をつけて『羔』と題する綴本を作って、⁽¹⁾結婚の日まで丁度一年間、十三冊書いた。それが私の結婚準備というものであった。その中からすでに印刷に附したものもあるが、この「祈りの宗教哲学」は今回はじめてである。ただし原作の古い仮名づかいはよみにくいで新しくした。

もう半世紀も昔、二十代の終りにこんなことを書いたかと自らあやしむばかりである。またまことに不思議に思う。「祈り」こそ私の生涯のやはりαでありωであることを。しかもこのαの文章で既に聖霊のことに確然と触れているのに驚いている。「聖霊を受けた始めの日」と記しているが、たしかにある感銘があつたのであろうが、まだ決定的ではなかった。決定的な受霊は残念ながらそれから約二十年後1950年の晩秋である。

〔文庫編集者註…(1)〕1930年、内村・藤井両巨星が天界に昇ったあと、三年間私は独りで日曜を遵っていた。その三年目なる1933年の12月23日に藤井武先生の親友塚本虎二先生の司式で伊藤順子と結婚した。(著作集第9巻『感想と紀行』第五章「人物回想」、五「塚本虎二先生」より)

○著作集第6巻『随想集』、第2部「偉大な偉人」、三「藤井武先生と私」よりはしがき

ここに載せる文章は今を去る27年前、1933年(昭和8年)7月及び8月に、『羔』誌第9号と第10号に書いた旧稿そのままである。ただ仮名づかいだけを変え、紙面の関係上、適宜カットしたところあるだけである。「」内はこのたびの補足。『羔』誌というのは全く私的なもので、原稿用紙に書いたままのもので、誰に見せるというものでもなかったから、未発表のものである。研究、論説、詩歌、随筆といったものを1932年11月から毎月書いて翌年11月でひとまず筆を擱いた私個人としては、極めてなつかしい思い出のものである。



この度、藤井先生三十周年を、去る7月14日にただ独りで迎え、その半日を『羔の婚姻』で読み暮らした。7月末日、久しぶりでごったがえしの書斎の整理をしていたら、箱の中から右の『羔』誌が13冊出てきた。表紙の目次を次々と見たら、『藤井先生三周年記念号』(「羔」第9号)というのが目についたので、開いて読んでみると、三周年の所感も、三十年を迎えた今日この頃の私も全く同じであるのに驚き且つ喜んだ次第である。このまま三十周年記念号として発表しようと直ぐ思いあたり、奇しき天来のみちびきに感謝した。今から見れば勿論当時の考え方には不備の点もある。私の信仰内容は進展して、死に至るまでやまないであろう。しかしこれを読んで、本質的にいかに同質的なものが貫いているかを見てあやしむばかりである。何を書いたかを全く忘れていたが、かくも今昔一貫しているとは。

『羔』9号所載のものは、藤井先生を特にたましいの世界での恩師としてもつ私が、いわば無教会における師弟関係というものは、どのようなものであるか、またあるべきかの問題を念として筆を進めているような「師弟論」といつてよいもの。そこで、これを標題とした。今の私としてなお補筆すべきものがあるが、旧稿をなるべくそのままにしたい気もちから、補足はわずかにとどめた。

『羔』第10号所載のものは、師弟の具体的個人的な想い出の記の一端である。主として職業のことに関するので、「天職論」と名づける。「」内はすべて今回第34号「曠野の愛」誌のための補筆。

